

女怪傑!  
**アムテギ**  
BEGINNING

瀧澤春

表紙イラスト：けいじえい

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された  
『女怪傑！ スメラギ』  
に基づいて作成しております。

※本作は二次元ドリームノベルズ『女怪傑！ スメラギ』（キルタイムコミュニケーション・刊）とあわせてお読みいただけますと、よりお楽しみいただけます。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



女怪傑!  
アムテギ  
BEGINNING

瀧澤春  
表紙 / けいじえい

# 登場人物紹介

## Characters

---

おおこうち いつき

### 大河内 樹

学院の演劇部部长。天才的な演技力を持つと同時に、様々な格闘術を習得している。生徒会の悪事を挫くため、ゴスロリ衣装を身に纏い怪傑スメラギとして活躍する。

こうさかとも み

### 高坂智実

学院の生徒会長。立場を利用し、様々な悪事を裏で行う。実は同性愛好家。

ないとう あおい

### 内藤 葵

樹の親友で、演劇部のパートナー。とても優しい性格の持ち主。

やまがた りようこ

### 山県 涼子

智実の手下で、生徒会役員。

ば ば ひろ の

### 馬場広乃

智実の手下で、生徒会役員。

都内に広大な敷地を有する私立聖マリアンナ学院。

女子校でありながらも、生徒一人一人の自主性を重んじる開放的な校風と制服のかわいらしさもあって、他の進学校と比べてみても、志望者の数は決してひけをとらない。

しかし最近、その自由な校風は変わりつつあった。その大きな要因は、新生徒会の発足である。

生徒会は部活動として何ら実績の出せていない部の活動費用を次々とカット、さらにはサークルや少人数部活動の活動停止。

噂によるとその費用は生徒会のメンバーたちの交遊費に回されているという。

さらに。生徒会を非難する生徒は、生徒会役員で組織された懲罰委員会に呼び出される。その査問会で今まで退学や停学を受けた学院生はいないのだが、その査問会以後はまるで人が変わったように、気持ち悪いほど生徒会へ従順になるのだ。

新しく生徒会長となった高坂智実こうさかともみがこれを指揮している。当初はこれに反対する声は多かったが、新しい生徒会が編制されて半年も経たないうちに、懲罰委員会のことが広まり、生徒会を批判する生徒はいなくなってしまった。

ここまでの権力をどうして生徒会は行使できるのか。それは会長である高坂智実の母が聖マリアンナ学院の院長で、智実は母親の地位を笠に着て、強権を度々発動できるからだ。教師に頼もうとしても智実の背後の母親におびえて、関わりとうせず、頼りにならない。

自由な校風は制限され、学院全体は活力を失いかけていた。  
謎の美少女が、学院に登場するまでは……。

「あん、あつう……」

薄暗い室内に響く、くぐもった声。

学院内の空き教室の一角。二人の少女が一人の少女と対峙していた。

二人の少女は白いワイシャツの上に、ブラウンカラーの胸元に校章の入ったブレザー、臙脂色のプリーツスカート、白のハイソックスというこの学院の指定制服の姿。清楚でありながら、かわいらしさを併せ持つ清廉な女学校の雰囲気とマッチした作りの制服だ。

しかし。二人の少女のワイシャツの首元にかけているネクタイはだらしく緩まり、ワイシャツのボタンは上から二番目まで外され、首筋から胸元近くまでを露出していた。窓から注ぐ青白い月の光に、笑いが抑えられないといった様子の二人の女生徒の横顔が照らされる。その表情はこれから自分たちの行うことを想像しているせいか、上気し艶を帯びていた。

対する少女は縁無し眼鏡に、お下げ髪を二房垂らした、気の弱そうな女性のイメージを凝縮したような面立ち。少女はブレザー、ネクタイがない以外は目の前にいる二人の少女と変わらない。その格好とその引きつった表情とを見比べれば、大人しい生徒が気晴らし

に冒險してみたわけではないことは明らかだ。

そばかすのついた顔が月に照らされ、眉はハの字になり、少女の顔を病的なまでに青白くしていた。

普段なら注目など浴びるはずもない少女は、今その身一杯に視線を感じていた。その口にはポールギャグを噛まされ、手を椅子の背もたれに、足は椅子の前脚に縛り付けられ、同性の生徒たちに向かつて足を大きく広げているという、無様な格好ではあるが。

「あんたつてさ、結構綺麗な肌してるのね」

スカートがめくれ、剥き出しになった太股を、少女の一人が軽くなでる。

「んんっ、んふっ……」

くすぐったさに身を振らせ、少女は声を詰まらせて吐息を漏らした。サアツと顔は朱に染まり、自分の出してしまった声に羞恥心を刺激されて俯いてしまう。

「あらあら。神聖な学舎で、変な声出しちゃつて。悪いコね」

少女は瞳を涙で潤ませ、項垂れた。

新生徒会にまつわる噂を少女は体感していた。噂に曰く、生徒会は百合園である。生徒会メンバーは、花の蕾である可憐な少女を辱め、犯すことを快感とし、罰とは名ばかりの彼女たちの趣味を満足させるための組織である、と。

そしてそれは噂ではなく、紛うことなき事実だったのだ。

「生徒会に遊んでもらえるんだから、もっと楽しそうにしろよ」

「そうそう。今日は会長がいらっしやらないだけ、ある意味あなたはラッキーなのよ」  
会長がいたら、あなた気持ちよくなりすぎて死んじゃうわよ、とケラケラと嘲笑う二人の少女の胸元に光るのは、生徒会バッジ。

今や学院の実質的支配者の生徒会の役員たちは、自分たちの嗜好を満足させるために、毎夜様々な理由をつけて呼び出した生徒を弄んでいた。

全ては生徒会長、高坂智実の迷惑に従っている。智実は昔から女性を愛してきた。

そしてこの学院を自らの楽園創造のための道具として私物化するために、生徒会長になったのだ。

今ここにいる二人の役員を含めた生徒会メンバー全員が、乙女同士の秘め事の楽しさを智実から教わり、また虜となった。智実の愛奴と言ってもいい。そう考えると、生徒会役員たちもまた智実の百合楽園創造の犠牲者と言ってもいいかもしれない。

しかしすでに智実の愛撫の虜となり、半ば洗脳された彼女たちに被害者意識はないだろう。

「ほら、何とか言いなさいよ」

シヨートカットの少女が、眼鏡少女の頬をつつついた。

「ああ、そっか。この娘、喋れないんだよ」



ロングヘアの少女が、仲間のショートカットの少女に向かって、自分たちの獲物が口に啜えているボールギャグを指した。

ロングの少女はボールギャグを指でそつと摘んで、眼鏡の少女の顎下にずらした。唾液が、ボールギャグに絡み付いて落ちる。

「うわっ、汚なっ」

少女たちは飛び退いた。

「た、たふけて下さい」

女生徒は今にも泣きそうに顔を歪めて、懇願する。

「馬鹿なコね」

ロングヘアの少女は笑みを漏らし、少女の胸元を掴んだ。そのままグイッと左右に引っ張り、はだけさせた。

まろび出る下着ごしの発展途上の乳房。

「洗濯板じゃん」

「ほーんと。ギリギリAカップ？」

まじまじと二人の少女が、眼鏡少女の下着に包まれた乳房を観察する。喉奥から放り出すような悪徳の笑みが、少女をさらに追いつめる。

「もうやめて下さい……許して下さい」

「ふーん。じゃあ、奨学金もらえなくてもいいのね」

ショートカットの少女が、これみよがしの態度で言った。気弱な少女は、その哀訴の表情を固まらせた。

最近懲罰委員会の噂が院内で広がっているせいか、警戒した生徒たちは生徒会を非難することなく、従順になり始めていた。

反生徒会を吹聴する輩を裁くために設けられた懲罰委員会。生徒会はそれを開く口実を、失ってしまったのだ。

そこで、学院からの奨学金をもらっている生徒たちへ狙いを変えた。聖マリアンナ学院はお嬢様学校という固いイメージを払拭し、才能ある生徒を多く招聘しょうへいしようと、多種多様な奨学金を用意している。最終的には、学院に寄付をした人物たちが決定を行うのだが、奨学生推薦名簿を作成するのは生徒会の役目なのだ。つまりは、生徒会に睨まれては奨学金を得られなくなる。

それをエサに脅しては、毎夜自分たちの享楽のために女生徒を呼び出す。奨学金をもらっている生徒の大半は家計が苦しいのだから、これを止められては学院にいることはまず出来ない。

「……わ、分かりました」

奨学金という命綱を人質にされ、自分のコンプレックスを覗かれ、品評され、少女は涙

をポロポロこぼしながら、声を上擦らせながら頷いた。

「分かればよろしい」

「ふん。涙浮かべちゃって。カマトトぶるな。こんなに乳首勃たせてるくせにッ」  
ぐにぐにと乳首を掌で磨り潰されながら、乳房全体が揉まれる。

「はふっ。うふっ、むうっふう」

乳肉を炙られるようなもどかしさに、少女の瞳が熱を帯び始めた。

「もう感じてるわけ？ やらしー女ッ」

ズリッ。

「ひゃあうっ！」

ブラが無理矢理ズリ下ろされ、パンパンに張り詰めていた乳首が擦れる。摩擦の余韻が乳首に絡み付き、少女は思わず身悶えた。血液の大量充填に真っ赤に染まるニップル。

「こっちはどうかなく？」

ショートカットの少女がウキウキしながら、女陰の園に手を伸ばす。そして指が、下着ごしの牝唇と触れあつた瞬間。

「や、あああん！」

熱情が一気に奥底で爆発する衝撃に、少女は全身を打たれた。ぶるぶると、すべやかな大腿部は小刻みに痙攣し、ツンと丸い顎を持ち上げる。

途端。お漏らしでもしたような液体の迸りを下腹部一杯で感じた。強い女の匂いが立ちこめ、少女は全身を震わせた。

「ウソ！ こいつ、マ○コちよつと突いただけでいったわよつ」

純白のショーツのクロッチ部分から、へそに向かうように切れ上がった肉溝にかけて、黒い染みがジュワリと滲み出す。潮吹きではないが、いった瞬間に肉壺の奥で燻っていた愛液がドツと漏れたのだろう。

「ゆるひいてえ。も、もうやめてえ……」

少女は絶頂まで意識を高められ、呂律が回らない。真面目な生徒の見せるイキ顔は、平静の状態とのギャップもあつてか、いやらしい。

「ねえ、もういいんじゃない」

「そうね、私も、そろそろ限界かも」

頬を桜色に染めた二人の性虐者は、頷き合う。ショートカットは眼鏡の少女の後ろに回り込み、双乳果を両手で思いつきり扶む。

「はううううう！」

痼<sup>しじ</sup>り始めた乳房を優しく、時に強く揉みしだく。眼鏡の少女は全身に流れ込む、甘い陰気に呑み込まれ、酩酊状態のように喘いだ。

「あなた、お名前は？」

「はあウ！ 二年の、益田知子、ひいあッ」  
ますだともこ

乳首の先端をぐりぐり指の腹で潰され、乳房深くに沈められながら、耳朵を甘噛みされ、少女はヒクヒクと全身を痙攣させた。拘束された体勢で、椅子にクロッチ部分を擦り付け、全身を下から上へ射抜くような疼痛のベクトルに惚ける。

「知子さん、おめでとう。これからあなたは私たちに初めてを捧げるのよ」

それまで離れた位置にいたロングヘアの少女はくると振り返った。少女は自分の腰にペニスバンドをつけていた。

「……えっ、へえっ！」

少女はあまりの事実に、蠱惑的な夢から目覚めてしまう。目の前にはテラテラと輝く疑似男根。

「それだけ濡れてるんだからきつと大丈夫よ」

眼鏡少女の罪深き陰唇は依然として、ゴプリゴプリと愛液を吐き出し続けていた。

「覚悟を決めなさいよ」

股ぐらに腕をつつこまれ、下着を無理矢理引き裂かれる。

「やあああああつ！」

噎せ返るほどの熱と、濃厚な莖の香が空気中で爆ぜた。

「泣いても喚いても、誰も来ないよー」

「そうそう。用務員はモウロクジジイだし」

正面から迫る少女が肉棒を挿れようと少女の太股を鷲掴む。

「ヤっ！ いやあ！ ……やあんふう…?!」

少女の愛蜜べつとりの小陰唇にペニスバンドの先端が押し当てられた途端、脊髄を巡る電光の捻りに、少女は不覚にも感じてしまう。

「それじゃ、私いかせていただきまーすっ」

ロングヘアの少女がそう高らかに宣言した時だ。

「もう、おやめになられたらっ？」

彼女たち以外の生徒はもう誰もいないはずの教室に響く、力強い少女の声。

「な、何よっ」

少女二人は驚きに目を見開いて、声の主を探る。

「どこを見てらっしやるのかしら？」

背後からの声。二人は、急いで飛び退いた。

そしてそこには、少女が一人立っていた。

黒地に、白の三段レースを飾り付けたドレスに包んだ身体。胸元は大きく膨れ、キュッとウエストは締め、メリハリが利いて、一見しただけでその細身の肢体がグラマラスさに溢れているのが分かる。フリルの下から覗く脚は、タイツを思わせる繊細な生地のおー

バーニーソックスで包まれ、むっちりとした女性の柔肌を包んでいる。足首がよく締まっているせいか、ふくらはぎが妙に肉付きよく見えた。

その大人びた肢体をゴスロリという少女趣味と子供っぽさの混在した服で隠すことによつて、肉感のある体躯の耽美性を強めているようだ。

絹のように柔らかそうな黒髪はツインテールに編まれ、微風に躍る。頭の上には純白のフリルを幾重にもあしらつたヘッドドレスをつけ、目を覆うマスクは血よりも赤く、美しく、扇情的な印象を与える。しかしそのマスクに縁取られた双眸は眦が持ち上がつて鋭く、黒真珠を思わす輝きの瞳が穿たれている。唇はうつつすらと紫のルーージュに飾られ、淫靡で悪魔的な印象を与える。

「あんたね？ 最近学院に出没してゐるっていう女はっ」

突然の登場に気圧されたショートカットの少女は、犬歯を剥き出して吼えた。

「あんたを捕まえたら、智実様はきつと大喜びね。準備してきた甲斐があつたわ」

ショートの少女は竹刀を、ロングの少女はスタンガンを得物にそれぞれ取り出した。

「この学生は、すごいものをお持ちのようね」

だがゴスロリ少女は怯むことなく、二人の少女を余裕の笑みで眺める。

「余裕ね。でも、私は有段者よ。——いやあああああッ!!」

さつきまで女を味わつていたとは思えない鋭声と一緒に、ショートの少女は右足を前に

（騙されてはダメ！）

明らかに智実の顔にはどんな演技をしても、隠しきれない悪意の翳りが見えた。葵なら、それが嘘だと分かるはず。しかし今の不安定な精神状態の彼女に、それを求めるのはあまりに難しかった。

「どうかしら？」

親友に声をかけてやりたかった。だがもしこんな痴態を曝しているのが樹だと、葵が氣付いたら。

あくまでゴスロリ少女は樹としてではなく、スメラギとしてしか言葉を出せない。

「やめなさい！ そんな女に従うのはッ」

葵は、沈黙している。

「黙りなさい。淫乱っ」

涼子は、今度は剥き出しの牝溝をローターで撫で上げた。

「ひいああッ」

布ごしではない、肌への直接的衝撃に、スメラギは四肢に絡むロープがギシギシ軋むほどに足掻いた。

（またですわ。漏れが止まらないっ）

嬌声を上げさせようと、下腹部から上ってくるこそばゆさが下顎を刺激するのを、必死



に耐える。だが上の口は守れても、下の口は透明な愛液を垂らし始めた。

「だらしなのおま○こですわねえ。ふふ、あなたを慕っているファンが残念がりますわよ？」

「ば、馬鹿にするんじゃないやありませんわっ」

カメラを通し、逐次スメラギの痴態はライブ映像としてパソコンに映し出されている。奥から滾々と湧く愛蜜を抑えようと腹筋に力を入れるのだが、

「はうっ、ううう……」

力めば力むほど膣洞は収縮し、膣壁に滲んだ愛液同士がぶつかり、拉げ合い、クチュリと潰れ、甘い痺れが腹に広がってしまう。

「おま○こくちゅくちゅ鳴らして。なんてやらしい娘でしょう」

「私がいやらしいなどっつ。そんなことありませんわッ」

そんな少女の下に、葵がおずおずと近づいてくる。

「やめてっ。そんな人たちの言うことなんて聞いては……っ！」

「すみません。で、でも。このままじゃ、私の大事な親友が、私みたいになっちゃうんです。本当にあなたが私たちを守ってくれる正義の味方なら、私の親友の代わりに辱めに耐えて下さい」

葵はスメラギだけに聞こえる声で呟いた。

大事な人。樹の胸の中に嬉しさが込み上げたが、自分のために葵が犯されたことを思い出すと、急激に冷えきる。そして今の葵の頭には樹のことしかないので。親友を守るなら何を犠牲にしようとも、いとわれない。葵の瞳には異様な決意の色が見えた。

ゴスロリドレスの胸元に手をかけた。

「お待ちなさい。直接触る前に、服ごしの感触を説明しなさい」

葵はその手を、ゆっくり布地を押し上げる豊満なトップへ添えてきた。エッチな手つきではないが、確かに揉まれている感触が胸奥に迫ってくる。

「と、とても柔らかくて……ドレスの生地はとても薄い、です。おっぱいの尖った先っぽ、分かります」

葵の指先が、ピンポイントに半勃ちの乳首を軽く撥ねた。背骨にツンツ、と小さな電流が走る。

葵の細い指が動けば動くほど、ゴスロリの胸元に皺が寄った。その皺は、ただつけられているだけでなく、葵の手の動いた形、つまりスメラギの楕円の乳の緩い曲線に沿って、つけられる。まるでドレスという体裁をとった下着のように、ゴスロリ少女のプロポーションを浮き彫りにする。

「ウエストはどうかしら。コルセットとか巻いていない？」

肩幅よりむっくり飛び出た胸の輪郭撫でから、そのままウエストへ葵の手は下る。キュ

ツと縊れたウエストで、葵の指が細かに震える。

「きゃっう、う…ふ」

布地を通してのくすぐったさに、スメラギは甘い鼻声を出し、身体をくねらせてしまう。ツインテールが鞭のように激しく揺れた。

「何もつけてないみたいです。暖かくて。お肉柔らかいです」

（葵。興奮して…？）

樹は、葵が微かに息を荒げているのが分かった。

「そこまでいいわ。さあ、直に触ってご覧なさい」

葵が手をかける。バツとくつろげられた胸元。

「だ…駄目ですわ！」

「エロい胸ですことッ」

ドレスの下から現れたのは、黒白のブラを纏った、たわわな肉果実。今にもはち切れんばかりに、ブラを押し上げている媚乳に周囲の視線が集中する。

「ホホホ。あなたの痴態を多くの人たちが見ているようですよわね」

開始から十分も経たないうちに、アクセスカウンターは三桁台を刻んでいた。

（あんな多くの方たちに見られてますの!!）

スメラギの身体は緊張からか、汗ばみ始める。

「気持ちよくするから。スメラギ」

葵は両掌でグッと、ゴスロリ娘の豊満な胸を掴んだ。力の強さに、スメラギの顔が歪む。乳峰に食い込む、葵の五指。

「やめて。あなたはそんなことをしてはっ、——うんんんっ!？」

ビリビリッと痺れが下腹部を貫き、蜜香がムワツと広がる。

「クリちゃん、もうこんなに大きくしてる」

涼子のピンクローターが、充血して膨れた肉芽を、刮ぎ落とす勢いで穿る。

「はうう……うんんっ」

この場だけでなくパソコンごしの数百人の衆人環視に耐えようとするスメラギだが、身体が受ける快楽の飛沫は段々と大きくなる。

「スメラギの胸、柔らかい」

ブラに手をかけ、剥き卵のようにツルツルのトップが露わになった。

（葵に、人前に、胸を。恥ずかしい……）

葵はじつとり汗の粒が浮いた肉果に舌を沿わせた。

「くうっ。だめ、ですわっ」

舌のザラザラした感触が、仄かに心地よさを誘う。ビクンッ、と腰が持ち上がり、同時にピンクローターを恥肉全面で受け止めてしまう。顔を平手で打たれるような衝撃と一緒に

に、体感温度が一気に高まった。

「はうっ！ う、うう」

葵の舌粘膜が、胸の奥の心臓を刺激するかのようには鼓動が早くなる。胸肉の頂にある乳首はすっかり勃起し、グロスを塗ったように汗で煌めいていた。

「傑作ですわね。守るべき女学生の愛撫で悶えるなんて」

智実は長い黒髪を指先で弄りながら、口角を持ち上げる。

「すごく大きい……」

自分よりも一回りは大きいだらう乳房を目の前にして、頬を染めた葵は、口一杯に乳首を吸った。

「くううううっ！ 葵イ！ やめえへえっ」

チュパ！ チュパ！ と唇の啄みと一緒に、唾液が爆ぜる。

「ひい、あう、あうう」

スメラギの身に快美電流が巡る。痙り具合を強め、敏感になった乳首が唾液に包まれ、蕩けそうなほどに熱くなった。

「葵さん、あなたその方とお知り合い？」

ゴスロリ娘がたまらず口走った葵の名前があまりに自然だったことに、智実が眉根を顰めた。

てくる。

「お……お断りですわ!」

身体は痙攣を繰り返す。だが樹は激しく啖呵を切り、葵を見つめる。親友は自分がしたことが恐くなったのか、俯いたままだ。

「よろしいですわ。なら、快楽に狂わせて差し上げます」

智実の目配せが飛ぶ。涼子が微笑みながら立ち上がり、どこからか大きな瓶と注射器のような物を持ってきた。瓶の中には真っ白な液体が詰まっている。

「これはですね、浣腸器というのよ」

涼子の手慣れた手つきで、その液体をその浣腸器のシリンダーの中に詰めていく。かなり粘度の高い液物らしく、結構な時間がかかった。

(何ですの、あれは)

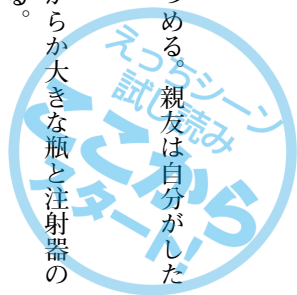
肉門が埋められているという状況で、この他に何をするのか。

「浣腸ってご存じ?」

「か、浣腸!」

「あなたにはこれから浣腸をして差し上げますわ。馴ればこれも、気持ちいいですわよ」  
さらに涼子も、

「くやしいでしょうね。正義の味方が浣腸。それも、この液体は内藤葵を犯した時、散々



中出しした精液なのよ」

（葵の、ですってっ!!）

あの瓶に入っているのは葵の悲愴さと苦しみの凝縮だ。怒りが再び、込み上げる。

「あなた方は人の皮を被った獣です——くううう！」

ゆつたりとしたグラインドで、子宮口が衝かれ、甘痛が身体を抜ける。

「その獣にあなたは組み伏せられているのですわ」

「絶対許しませんわッ」

ライブ映像は切り替わり、尻の割れ目が見えるローアングルからの映像になる。刃物のように鋭く尖った気持ちに、綻びが生まれる。

（そんなあ、私の……汚い、ですのに）

脚から尻朶、息づく肛門にいたるまで、丸見えになってしまう。

「ひう、つめたあ！」

「お尻が傷つかないように準備しないと」

押し付けられた指と、その指の腹の異様なひんやり感。菊孔がそれにひくつくのが分かる。すでにアクセスカウンターは二千に届こうとしていた。

（このままでは本当に）

これ以上の屈辱、辱めが広まってしまふ。

「ふん、辛そうね。いくらあなたが私たちを成敗しようとも、こうして確実に傷つく人間は増えているのですからね。結局あなたの自己満足なのですわよ」

智実のその台詞が、ずっしりと重たくスメラギの心に響いた。

（わたくし……のやつていることが……）

否定できない。スメラギは確かに昨夜眼鏡の少女を救えた。しかし親友を輪姦の苦しみからは救えなかった……。それと同じことが何度今まであっただろうか。

（わたくしのしていることが、全部無駄？）

だが少女には感傷に浸る間もない。

「この体液が、あなたの罪科そのもの」

智実は瓶の中に入れていた液を掌に載せると、そのままゴスロリ少女の衣装へ塗りたくり始めた。ぐにやり、と鋭い悪臭とぬめりの嫌悪が、薄布を透過し、まだゴスロリ衣装に染みを作る。

スメラギのシンボルともいうべき、ゴスロリ衣装が白濁に汚されていく。すべやかな衣装の感触が体液を目一杯に吸い込み、ぶよぶよになる。体液を吸った布はいくらか膨張し、ズンツと重たく少女の身体にのしかかってきた。

ゴスロリ少女は親友の処女血混じりの体液に感じる熱さに、内臓が灼けそうな苦しみを味わう。親友へどんな言葉を尽くしても拭いきれない傷を残してしまったことへの罪悪感



が、栗の花の匂いと比例してどんどん強まってくる。

「あん、んふ」

精液が顔にも塗られる。毛穴の奥底まで満たされる汚辱の洗礼に、顔面筋肉が引きつる。「うふあ。ふうふっ！」

首を巡らせられない、真後ろでの状況をパソコンが映す。菊皺に囲まれた微かな孔は、塗りつけられた液体で淫靡に輝いていた。そこへ宛われた浣腸器の先端。

「ひいああああー！」

チュルチュル。背中 of 繊毛が一気に逆立つ。温かな体温で包まれていた腸管に鋭い感触。ねっとりとして、シリンドーから吐き出される白辱液は人肌ぐらいに温かい。突然の液物注入に腹部が圧迫され、肉溝にめり込んで感じる肉棒の感触と合わさって、スメラギの身体を苛んだ。乳首は痛いぐらいに勃起してもなお、今の瞬間にはさらに一回り成長し、乳房全体が堪らない熱を持つ。

（葵のが、入ってますわあつ。親友を汚した男たちの……）

「いやですわあ、あああ！ また、と、飛んでしまいますわあ〜！」

グツグツと腸粘膜が煮え滾ってしまいそうで、ゴスロリ娘は指先から爪先まで痙攣の波状に声を蕩かす。注入だけで絶頂する樹。きゅううと膣も連動して、擬似男根を締め上げる。

（このままでは、おかしくなってしまう）

親友の葵が顔を火照らし、自分の処女血が混ざっている精液を浣腸され絶頂するスメラギを見ている。

「ひいあッ。あつくう……つ、衝いては、あふあふあふっ！」

ズンズンズンッ！

息を詰まらせ、智実による子宮口衝きに惑乱の嬌声を上げる。奥で凝り固まった愛液が解され、散らされ、蜜壺から絶え間なく飛び散っていく。

(お腹、壊れてしまいますわ……ああんッ)

グルグルと雷鳴の轟くような低い音が腹中で疼き、たけ哮った。

「早くお漏らしなさいっ！」

巨乳に智実のすべやかな指先が沈み、膨れた乳首が指腹に刮がれる。脊髓に甘美の痺れが迸り、肉芯が溶けそうなほどに灼けた。

(葵、ごめんなさい。わ……わたくしいっ……！)

「ダメダメダメえっ！ も、漏らしてしまいますわあああああ——！！」

ブリュリユリユリユリヤアアアッ。

幾人もの男の精と親友の破瓜血が排泄器官から噴き出る。ゴスロリ娘は、公開脱糞の衝撃と直腸を抜く混濁に悶絶した。

「あっういひいひいひいひい」

(見られてしまいますわ。こんな姿を、たくさんの人たちに)

粘膜組織が溶かされて、流れていく激感に、目の前がストロボを焚かれたように白光に包まれた。跳ね上がった汚液が跳ね返って、少女のゴスロリドレスを穢す。

「こちらでも、おいきなさいっ!」

ペニスバンドが駄目押しの一撃を繰り出す。グリユア、と子宮口がこじ開けられる。

「ひいあああ、今ひやあめえ、浮く浮くウツクウウウッ」

胴にピンを刺された蝶のように、身をカタカタと震わせ、やがて硬直した。パソコンの画面上に肛門が拡大され、その孔からゴプゴプとまだ漏れる精液の残滓の映像が映し出され、

「えへへ。正義の味方さんの、エロ顔をキャッチッ!」

巧みなカメラアングルを駆使され、絶頂に歪むだらしない顔をクローズアップされてしまう。

(やめて、やめて、これ以上撮らないで)

絶頂の余韻から抜け出せないままメラギは頬を上気させ、呼吸のための吐息さえ喘ぎに聞こえる。

「ウウ! くふおん」

不意に身体が前のめりになった。智実が奥へずつと押し付けていた擬似ペニスを引き抜

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**